



小松 実紀/ Miki Komatsu, *個 III one II*, 2020, H23.5×W13.5×D13.5 cm/ H9.2×W5.3×D5.3 inch, ガラス/ Glass



黒川 徹/ Toru Kurokawa, ツイスト/ *Twist*, 2020, H43×W42×D23 cm/ H16.9×W16.5×D9.0 inch, 陶/ Ceramic



打田 翠 / Midori Uchida, 陶 / Ceramic

7月展覧会

若手作家展「陶・磁・璃」

出展作家 (50音順) :

打田 翠 川浦 紗季 木野 智史
黒川 徹 小松 実紀 村山 まりあ

2020年7月7日(火) - 8月1日(土)

現代美術 艸居

京都市東山区古門前通大和大路東入ル元町 381-2

開廊時間 : 10:00-6:00PM 定休日 : 日・月

現代美術 艸居 〒605-0089 京都市東山区元町 381-2
Sokyo Gallery 381-2 Motomachi, Higashiyama-ku, Kyoto, Japan 605-0089
T: 075-746-4456 F: 075-746-4457 info@gallery-sokyo.jp www.gallery-sokyo.jp



プレスリリース

この度、現代美術 艸居では 20 代、30 代の気鋭若手作家 6 名によるグループ展「陶・磁・璃」を開催します。本展では工芸という古来から継承されてきた伝統から逸脱し、現代に生きる若い彼らが陶、磁器、硝子という素材を使って作り上げる革新的な作品をご紹介します。

打田翠の作品はやわらかな丸みを帯びた造形と人格がにじみ出るかのような自然で素朴な色合いのグラデーションが特徴的です。静かな風景と柔らかな輪郭を持つ彼女の作品の中でも、「Landscape」シリーズでは炭化により生まれる色彩の変化で深みのある存在感を創出しました。いくつかの色を重ねる練りこみや楽焼など、様々な陶芸の技術を使い分けながら制作活動を行っている彼女ですが、手びねりと磨きで丁寧な造形を作りあげた後、最後は自身の作品を火に託します。作品それぞれに異なる色合いは火と土と銅によって引き起こされる、瞬間的な偶然性から生み出されます。

川浦紗季は土の性質を「エログロナンセンスだ。」と言います。近年の作品は、見る人の心に違和感なくすっと入り込む綺麗で見やすい形態が多いと感じている彼女は、エログロナンセンスという土の性質を受け入れ、自身が嫌われることも一挙に引き受けた上で、フォルムだけでなく色味までもが肉々しい作品を制作します。また、「制作とは刃物で体の一部を切って差し出すことと感じる。」と言う川浦は、知性や理性ではない、痛々しくもありながら快感を求める本能に従って制作に向かっています。単に綺麗なだけではない、時には嫌悪感をも抱かせるような生々しい造形は、土と作家自身との対話の中から現れるのです。

磁器という素材が造形に繊細さ、儂さ、硬質さを表し、強さと弱さという相反するものを共存させる力を持つと考える木野智史。彼は磁器轆轤での技法を用いた制作活動を行っています。木野はテクスチャーを消す作業、土の塊が薄くなっていく過程には轆轤が最も適していると考えており、磁器轆轤でしか生み出せない、空間に余韻を残す造形を作ることを目標としています。そうして作り出された彼の作品は周囲の空間を包みこみ、静謐でありながらも力強く澄んだ空気を生み出して、その滑らかな曲線は素材と技法との関係を包括しつつ、作家が目指す独創的な空間を作り上げます。また、本展に出展される「嵐(捻)19-4N」のシリーズ 4 点の内 1 点は京都市京セラ美術館に収蔵されている同シリーズの作品です。

物理的抽象美を追求する黒川徹。本能的な感覚と理性で独自の数学的な世界を宇宙や自然界に見る幾何学的な形のように視覚的な造形に置き換えます。彼の作品の特徴である銀黒陶は、黒陶より高温焼成することで、形をより明確に見せ、結晶化した表面が光の反射を受ける度に変容し、独特な世界を醸し出します。本展でご紹介する新作 2 点は、丸みを帯びた造形がぐるりとしたカーブを抱いていたり、伸びる線が空間で交差し合い、陶という制限の中から巧みに作り上げられた新作です。



村山まりあは「認識する」ことを制作の主題としており、動物をモチーフにしたシリーズは剥製が制作のきっかけになっています。陶を用いる理由として、焼成を重ねるにつれて想定を超える変化を見せる陶の可能性を感じられ、また、陶芸の制作過程を踏んでいく行為が自身のコンセプトである対象にイメージを重ねる行為自体を表現することに適していると村山は述べています。彼女は動物の死骸、装飾品、生死のイメージをひとつのオブジェクトに表現することで、生と死が交じり合う日常と非日常へ向けられる認識を私たちに問うています。

本展の出展作家では最年少、現在学生の小松実紀。彼女は自身が扱う素材であるガラスに人間の存在を重ねています。高温で溶けたとろりとやわらかいガラスに内臓や血液といった人間の肉体的な存在を感じ、冷えて固まった壊れやすいガラスにはその儚さや緊張感から、心の繊細さや脆さという人間の精神的な存在を感じると言います。小松はそのようなガラスを扱うことは人間である自身の存在を確認する行為でもあると言い、このような人間の存在を確かめる行為によって生み出される彼女の作品は、自分自身と向き合うきっかけを私たちにも与えてくれます。

日本人が古来より受け継ぎ築き上げてきた工芸の世界。温故知新。長い流れの中でまた大きな転換となる新技法と表現が確立されています。是非この機会に新鋭の芽生えを感じていただけますと幸いです。

作家紹介（50音順）：

打田 翠（うちだ みどり）

1983年神戸生まれ。2005年大阪芸術大学工芸学科陶芸コース卒業、2007年多治見市陶磁器意匠研究所修了。2019年から岐阜県瑞浪市にて制作。2011年第9回国際陶磁器フェスティバル美濃 坂崎重雄セラミックス賞受賞。

川浦 紗季（かわうら さき）

1987年愛知県生まれ。2012年愛知教育大学大学院教育学研究科芸術教育専攻修了。現在、愛知県瀬戸市にて制作。受賞歴は2010年蔚山国際オンギコンペティション入選、第44回女流陶芸展入選、2011年第30回長三賞常滑陶芸展入選。

木野 智史（きの さとし）

1987年京都府生まれ。2010年京都精華大学芸術学部素材表現学科陶芸科卒業、2012年京都市立芸術大学大学院陶磁器科卒業。現在、京都にて制作。主な受賞歴は2013年大阪工芸展大阪府教育委員会賞、The 4th ICMEA Symposium2013 グランプリ、2014年 The International Biennial of Ceramics of Marratxí グランプリ、2016年 Taiwan Ceramic Biennale 審査員賞、36 CICA2016 Second prize、2017年パラミタ陶芸大賞展パラミタ陶芸大賞、2018年有田国際陶磁展2位・佐賀県知事賞など。コレクションに富楽国際陶



芸博物館（中国、西安）、マラクシー市（スペイン、マラクシー）、新北市立鶯歌陶瓷博物館（台湾、新北）、ニューアーク美術館（アメリカ、ニューアーク）、国立スロベニア美術館（スロベニア、リュブリャナ）、ファエンツァ国際陶芸美術館（イタリア、ファエンツァ）、兵庫陶芸美術館（兵庫）、京都市京セラ美術館（京都）他多数。

黒川 徹（くろかわ とおる）

1984年京都府生まれ。2007年筑波大学芸術専門学群美術主専攻彫塑コース卒業。2009年京都市立芸術大学美術研究科修士課程工芸専攻陶磁器修了。主な受賞歴は神戸ビエンナーレ准大賞（2007年）、現代陶芸ビエンナーレ長三大賞（2007年）、国際陶磁器フェスティバル美濃17審査員特別賞（2017年）。2018年京ものアート市場開拓支援事業-Savoir-faire des Takumi プロジェクト参加。主な収蔵先はロサンゼルスカウンティ美術館（アメリカ、ロサンゼルス）、新北市立鶯歌陶瓷博物館（台湾、新北）、アルゼンチン近代美術館日本の家（アルゼンチン、ブエノスアイレス）、エジプト文化庁（エジプト、カイロ）、チュニジア文化庁（チュニジア、チュニス）、京都市京セラ美術館（京都）、滋賀県立陶芸の森（滋賀）など。

小松 実紀（こまつ みき）

1996年新潟県生まれ。2019年秋田公立美術大学ものづくりデザイン専攻卒業、東京藝術大学美術研究科工芸専攻陶・磁・ガラス造形研究室修士課程入学、現在在学中。2017年Urban Glassワークショップ Sayaka Suzuki クラス（アメリカ、ニューヨーク）、2018年第31回新島国際ガラスアートフェスティバル Davide Salvatore クラス（東京、新島ガラスアートセンター）でのワークショップ受講経歴あり。

村山 まりあ（むらやま まりあ）

2010年武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒業、2012年東京藝術大学修士課程彫刻学科修了、2012年東京藝術大学研究生として在籍。中国・景德鎮、滋賀県立陶芸の森、香港・ジャイアントイヤーギャラリーなどのアーティスト・イン・レジデンス滞在経歴あり。2019年京ものアート市場開拓支援事業-Savoir-faire des Takumi プロジェクト参加。2012年台東区長奨励賞、アートアワード トーキョー受賞。収蔵先に滋賀県立陶芸の森（滋賀）、茨城県陶芸美術館（茨城）、ヨーロッパアンセラミックワークセンター(EKWC)（オランダ、オーイステルウェイク）。

プレス担当：元林久美子

〒605-0089 京都市東山区古門前通大和路東入ル元町 381-2

motobayashi@gallery-sokyo.jp Tel: 075-746-4456 Fax: 075-746-4457